

2023年5月14日（日）主日朝礼拝説教

『永遠の命に至る水』井上隆晶牧師  
エゼキエル書 47章6～9節、ヨハネ福音書 4章4～15節

### ①【水を飲ませて下さい～キリストは弱くなられた～】

イエス様はサマリアの町にやってきました。そこには昔の族長ヤコブが掘った井戸がありました。この井戸でイエス様とサマリアの婦人は出会います。正午ごろ、イエス様は旅に疲れ井戸のそばに座っていました。そこに一人のサマリアの婦人が水を汲みに来ました。水汲みは普通涼しい朝に行います。井戸の周りに皆が集まり、家族の事や日々の出来事を話します。しかし彼女はその婦人たちの輪に入りたくありませんでした。それは彼女が不道德な生活を送っていたからです。サマリア人はユダヤ人から軽蔑されていたのですが、その民の中でも、さらに彼女は軽蔑されていたのです。彼女はどこにも自分の居場所がなく、喜びを分かち合う人も、心配を相談できる人もいませんでした。彼女は人目を避けて生活し、誰にも会わない様に真昼の一番暑い時に水を汲みに来たのです。

イエス様はそんな婦人に「水を飲ませて下さい」と頼みました。井戸には桶がついていなかったからです。イエス様はこの婦人がどんな人で、どんな不道德な生活をしているか知っていました。しかし「あなたはふしだらな生活をしている」と責めるのではなく、「私はあなたが必要です。助けてくれますか」と言われるのです。このことは驚くべきことです。これは私たちが弱く、傷ついている人、さらに罪を犯す人に近づく時、どのようにしなければならぬかを教えています。つまり、上から、力をもって、正しさをもって接するのではなく、同じ弱い者どおしとして接するのです。強さが人を結びつけるのではなく、弱さが人を結びつけるからです。これが神が人になった神秘です。もし神が弱い人にならなかつたら、人と結ばれることはできなかつたでしょう。

### ②【井戸は深いのです】

この出会いが井戸で起こったことは大切なことです。昔から井戸は出会いの場でした。アブラハムの僕とリベカも、ヤコブとラケルも、モーセとチポラも皆、井戸で出会い、夫婦になりました。イエス様はこの婦人と永遠の関係を持とうとされているのです。このサマリアの婦人は私たちの中にも住んでいます。それは私たちが隠そうとする傷ついた部分です。

●あるアルコール依存の女性が、こんなことを話されました。「今、分かるのですが、私の中に二人の自分がいて、私が飲まない時には、飲む自分を見たいと思いません。つまり、自分の傷ついた部分です。神が、自分を愛するには醜すぎる、と思うのです。それで、私はその自分を否定します。そして、輝いている自分についてのみ話すのです。今は、神がこの傷ついた自分に出会うままにしなければ

ならないことが分かります。私の内にある、汚いところに、神が入るままにしなければならぬ、という事です。」

キリストは、私の光の部分も闇の部分も知っておられ、その両方を受け入れ、背負おうとしているのです。ですから恐れず、その傷ついた部分を委ねなければなりません。

しかし婦人は警戒して言います。「ユダヤ人のあなたがサマリヤ人の女の私にどうして水を飲ませてほしいと頼むのですか」(9節) イエス様は彼女に言います。「もしあなたが、神の賜物を知っており、また『水を飲ませて下さい』と言ったのが誰であるか知っていたならば、あなたの方からその人に頼み、その人はあなたに生きた水を与えたことであろう。」(10節) この言葉は彼女だけでなく全ての人に言われている言葉です。人がキリストに求めないので、キリストが逆に頼んでいるのです。これが私たちの本当の罪です。すなわち私たちは命とか慰めをキリストにではなく、この世に求めていること、生き方全体がキリストにではなく、この世に向かっていることです。

婦人はイエス様に言います。「あなたは汲む物をお持ちでないし、井戸は深いのです。どこからその生きた水を手にお入れになるのですか。あなたは、私たちの父ヤコブよりも偉いのですか。ヤコブがこの井戸を私たちに与え、彼自身も、その子供や家畜も、この井戸から水を飲んだのです。」(11～12節) このヤコブの井戸の水よりも良い水があるというのですか。あなたは一体どこからそんな水を手に入れることが出来るのですか、と彼女は言ったのです。「井戸は深いのです」という言葉は、「自分の苦悩は深いのです」という意味に聞こえます。

### ③【永遠の命に至る水】

そこでイエス様は言われます。「この水を飲む者はだれでもまた渴く。しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渴かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水が湧き出る。」(14節) ここでイエス様は自分は井戸であるといわれるのです。人生には二つの井戸があります。ヤコブの井戸と、キリストという井戸です。この世が与える水は肉体を一時的に癒すことはできますが、キリストが与える水はその人を永遠に癒すことが出来ます。そのキリストから出た水とは「聖霊」のことです。聖霊は神の愛を持って来るのです。聖霊が宿る人は、その人も井戸となり、永遠の神の愛が湧き出てくるのです。神の霊が人の中に入ると、抑えきれない喜びが溢れます。それはお腹の底から湧いてきて私たちの心の中の恨みや怒りや恐れをすべて飲み込み、平和と喜びを与えます。それが満ちるので、あたかもその人は地上にいても、天国にいるように感じるのです。

●19世紀の聖セラフィームが友人モトヴィローフと交わした会話が残っています。モトヴィローフが「私の中にすばらしい静けさと平安を感じますので、言葉で言い表すことが出来ません。…心の隅まであふれんばかりの喜びです。…」と

いうと、聖セラフィームはこういいました。「神の霊が人の上に降り、あふれる力が人を覆い尽くす時、人の魂は言い尽くせない喜びに満たされるでしょう。神の霊は触れる者いっさいを喜びに変えるからです。…この天国の前触れを味わうだけで、心がこれほどの喜びに満たされるなら、天国で待っている喜びは何と表現したらいいでしょう。」

#### ④【先に愛があったことに気がつく】

●今日は母の日です。クリスチャンの詩人、星野富弘さんがこんな詩を書いています。「ひとつの花のために いくつの葉が 冬を越したのだろう 椿の葉が 輝いている 母のように 輝いている」

椿の木は冬の間、青々とした葉をつけ、雪をかぶってもそれに耐え、春になると花をいっぱい咲かせます。星野さんは自分を花にたとえ、自分が花開いたのも、母の愛と忍耐があったのだということです。椿の葉が輝いているように、自分を愛した母も輝いて見えると言っているのです。これを読んで思いました。幼い時から、私は何回、母に頭をなでてもらったのだろう、何回抱かれた事だろう。その足や手は何回、私のために使われた事だろう。たくさん愛されたことを忘れてはいけな思いました。

●先日、大阪YWCAの聖書を学ぶ会で、漁師たちがイエス様に呼ばれてついて行った箇所を話しました。「ある日突然、神様が私たちの人生の中に入って来られ、私たちを呼ばれたのです。信仰の始まりは私たちの側ではなく、神の側にあるのです。聖書では神とイスラエルの関係は夫婦に例えられます。キリストは花婿、私は花嫁です。サマリアの婦人はいいました。「どおして私に話しかけるのですか？」私も問います。「どおして私を選ばれたのですか？」答えは、キリストが、私に惚れられたからです。惚れるのに理由などありません。「何でこの人と結婚したの？へえーこの人のどこがいいのかね？私はしないけどね」と私は思っても、する人はするのです。結婚は神秘です。救いも神秘です。人を好きになるのに理由はないのです。「私たちが愛するのは、神がまず私たちを愛してくださったからです。」(1ヨハネ4:19)」

私たちが気がついていないだけで、親の愛が先にあったのです。忘れてただけで、親がまず私を愛してくれたのです。同じように、神の愛が先にあるのです。キリストがまず私を愛してくれたのです。それだけは事実です。だから恐れず、キリストに愛されるままでいようと思うのです。もう既に私の中に共におられるキリストに感謝しましょう。